

日本物理学会男女共同参画推進委員会主催

領域【物理と社会】「物理から広がる多様なキャリアパス」シンポジウム報告

<開催経緯>

男女共同参画推進委員会では活動の一環として、毎年年次大会にてシンポジウムを開催し、学会員の皆様と本委員会の活動とを結ぶ重要な場として位置付けている。これまでも、キャリアパス形成に関する議論や男女共同参画の視点から女性のキャリアパスの拡充に向けたシンポジウムが開催されているが、ノンアカデミアに就職するというキャリアパスも統計データには未だに反映されていないのが現状である。現状および近将来において、研究者の需要と大学等におけるポストの供給のバランスの関係から従来の物理学のアカデミック分野だけのキャリア形成は益々難しくなっている。このような状況を踏まえ、シンポジウム担当であった野尻委員、森前委員長、鹿野委員を中心とし、これまでの若手研究者のキャリア形成の現状を再認識し、物理学者ではないキャリアを突き進む近年の成功事例をもとに、今後の若手研究者のキャリアパスの考え方を議論する機会としたシンポジウムを開催した。

<開催報告>

日時：2015年3月21日（土）13:30～17:00 21pCD

領域【物理と社会】「物理から広がる多様なキャリアパス」シンポジウム

場所：早稲田大学早稲田キャンパス11号館 505号室 CD会場

参加人数：およそ50名

昨年度末に行われた兵頭前会長、藤井現会長も出席した前年度3月に開催された男女共同参画推進委員会の中で学会員の皆様に広く告知するよう教示をいただき、各領域に許可をとりながら、許可のとれた領域においてはメーリングリストを通じて事前に告知を行った。また、ポスターを作成し、開催当日においても告知を行った。その結果、パラレルに専門のセッションが開催されている中においても大学院生からシニア教員まで幅広い世代の50名程度が集まり、シンポジウムが開催された。

鹿野委員による趣旨説明の後、非会員でありながらこれまで科学技術政策に深く携わっている政策研究大学院大学の角南教授より、現在、安倍政権が推進している科学技術政策から若手研究者のキャリアに対する議論が霞が関の官庁の中でどのように行われているのか？というとても臨場感のこもった話を紹介していただいた。そして、日本物理学会キャリアパスセンターセンター長の栗本教授より物理学会としてのキャリアパスに関する経緯と現在の活動が紹介された。その後、板倉委員より物質材料研究機構内での事例を含め、どのような人材を必要としているのか？という若手研究者にとっては非常にセンセーショナルな事例が紹介された。東京大学の横山准教授よりご自身のパーソナルなヒストリーか

らどうして科学コミュニケーションのキャリアを目指したのか？ その中で、どのような出来事があったのかという体験談を語っていただいた。最後に、JSTの宮下氏より物理学で博士号を取得し、博士研究員を行っていたところから、どのような経緯でJSTに転職し、現在の役職の中で物理学がどのように役に立っているのかという体験談を紹介してもらった。

総合討論では、各登壇者がそれぞれ前にあがり、総合司会の野尻委員より ①物理人材の強み ②キャリアパス多様化を妨げるもの ③アカデミクスの今後 という議題が提起され、議論が進められた。物理人材はどのような点を売りにできるのか？といった点から議論はスタートし、企業と学術業界との交流が疎になってしまい、お互いに信頼関係が失われてしまっているのではないかという議論が行われた。また、会場にいた若手研究者からは「指導教員との間でキャリアに対する考え方が異なった際はどのように考えればよいのか？」、「現在就職活動中で企業の方から博士課程に行かないほうが良いと言われているが、本当に博士課程に行くと損な事例があると思われるか？」といった意見が出された。登壇者の方々も丁寧に対応していただき、物理学を学ぶことによるポジティブな部分を強調していた一方で、これまで以上に物理学だけではなくもっと広い方向性と視野をもった人材育成が必要でないかという議論にまで及んだ。

キャリアパスセンターが物理学会の中にあつたことを知らない会員の方もいらっしゃつた。本シンポジウムにも、もっと多くの参加者がいれば良かったと残念がる参加者もいた。この点に関しては、物理学会員ではない方の登壇を要するシンポジウムにおいては日程調整が難しいということもあり、年次大会のシンポジウム開催だけではこのような研究者全体にかかわる問題を議論するのは難しいと感じさせた。しかしながら、今後、これまでに以上に告知をしなければならないということと、WEBやメール上の告知だけでは限界があり、何か有効な手立てを考えねばならないということが課題としてあげられる。

当初、若手研究者から「我々の職はどうしてくれるのだ！」といったような過激な意見が飛び交い、シンポジウム全体が収集のつかなくなるのではないかと心配していたが、シンポジウム全体を通じて、物理学を通じたキャリア形成によるポジティブな面が強調され、それを社会との関係性との中で今後、もっと活かしていかなければならないという課題も突きつけられた。それに対し、学会誌の委員から「企業の研究者からの記事も掲載を予定するなど、社会とのつながりに配慮した編集を企画している」とのコメントがあつた。最後のまとめで、森委員長から、学会でも企業の展示を増やす努力をしており、また理事会でも、大学院を卒業して企業に就職した研究者が、継続して会員となることを促す新システムの議論を進めるなど、社会との連携を推進する努力をしていること、また、シンポジウムでの物理のキャリアパスを拓ける活動に対する若手の要望について伝え、議論につながる事が提案された。

最後に、本シンポジウムの参加者一人一人が前向きに自分自身の置かれた立場の中でそれぞれのキャリアパスを考えることが出来る契機になり、組織や政策・行政面においても

現在のキャリアパスの考え方を議論するために本シンポジウムは活用できたのではないかと考えている。

(シンポジウム担当：鹿野豊 (分子研)、野尻美保子 (KEK)、森初果 (東大物性研))

<プログラム詳細>

プログラム：

座長：伊藤 公平 (慶応院理工)

1 趣旨説明 5 分

分子研 CIMoS 鹿野豊

2 イノベーション・ナショナルシステム改革と若手研究者のキャリアパス 40 分

政策研究院 角南篤 (非会員)

3 物理学会におけるキャリアパスへの取り組みの紹介 15 分

富山大理 栗本猛

4 キャリアの売り込み方と、キャリアの保ち方 25 分

物材機構 板倉明子

休憩 14:55 ~15:10

座長：中山 敦子 (新潟大超域)

5 最初から科学の情報発信を志していた私が物理研究の現場で得たもの 25 分

東大院理 横山広美 (非会員)

6 物理学からノンアカデミックへのキャリアパス～ポスドクから行政職への転職～ 25 分

JST CRDS 宮下哲 (非会員)

7 全体討論 55 分

(討論司会 KEK 素核研 野尻美保子)

8 終わりに 5 分

東大物性研 森初果